

「だんらん」
特別寄稿
③

社会では、役割分担のあることを身体を通して理解させる。その一つが、奉仕・体験活動

上田 勇夫

「おかえり」

「こんにちは」

中学二年生であるA君は、何ともいえぬ心地よい思いで元氣よくあいさつを返した。

同時に、2カ月ほど前のあの出来事が再び、鮮やかに脳裏に浮かんできた。

それはある冬の日、風の強い夕方であった。彼は学校から家路に向かっていた。わが家に近くなってきたとき、前方に近所のおばあさんが買い物の帰りと思われる大きなビニール袋を抱え、ゆっくりこちらに向かって歩いてくる姿が目に入った。

いつものように互いに無言ですれ違うはずのその直前、おばあさんの持っていた袋が彼の目の前で突然破れ、中の物が地面に散乱し、中には風に吹き飛ばされる物もあった。

少し迷ったが、彼はすぐさま夢中で落ちたいろんな物を拾う手伝いをしたのである。おばあさんは、何度も「ありがとう。ありがとう」

を繰り返した。

その数日後、母親から

「あんた、近所の人から聞いたんやけど、この前、学校帰りに〇〇さんのおばあちゃんの荷物を拾うの手伝ったんやてねえ。あんた何にも言わへんで知らなんだが、お母ちゃん、うれしかったよ。あのおばあちゃん、近所であんたのこと、今どき、珍しいやさしい若者やと話しているみたいよ」と告げられた。

彼は黙って聞いていたが、心の中で『あれくらいのが、他人を喜ばすのか』と心地良い気分に浸っていた。

新しい年が始まり、1カ月ほどたった。元旦を機にそれぞれ、さまざまな目標・願いを持ったことと思います。

しかし、A君ら青少年を取り巻く社会状況は決して安閑あんかんとしたものはありません。中でも人との関わり希薄化現象は年々強い傾向になってきているのではないのでしょうか。

近所に住むすべての

大人も子どもも相手の存在を認め合い、思いやりの声を掛け合う人間社会であつたら、どれだけ今を生きていることへの満足感が増すことになるのでしょうか。

昨年の暮れ、中央公民館3階の一室に『青少年奉仕活動・体験活動支援センター』なるものが開設されました。

また、準備段階です

が、センターでは4月からの本格稼働をめざし、4人のコーディネーターを中心として特に、青少年一人ひとりへの『奉仕活動・体験活動』の機会を学校だけでなく、家庭・地域でも今以上に増やし、活動させるための支援をねらいとしています。

ここでいう『奉仕活動・体験活動』

